

2019 年度
教育学部評価分科会
点検・評価報告書
(最終報告)

創価大学

1. 大学基準協会が示す大学基準及び点検評価項目に基づく点検・評価

第4章 教育課程・学習内容

(1) 現状の説明

点検・評価項目③：教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

評価の視点1：学部において適切に教育課程を編成するための措置

- ・ 教育課程の編成・実施方針と教育課程の整合性
- ・ 教育課程の編成にあたっての順次性及び体系性への配慮
- ・ 単位制度の趣旨に沿った単位の設定
- ・ 個々の授業科目の内容及び方法
- ・ 授業科目の位置づけ（必修、選択等）
- ・ 各学位課程にふさわしい教育内容の設定
- ・ 初年次教育、高大接続への配慮、教養教育と専門教育の適切な配置等

評価の視点2：学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成する教育の適切な実施

ディプロマ・ポリシーに示された学位授与方針とそのためのカリキュラム・ポリシーをつねに参照しつつ、また、以下に述べるような諸措置を講じることで、学士（教育学）学位の授与にふさわしい教育課程が編成されている。

・ 教育課程の編成・実施方針と教育課程の整合性。一方で、学年開始時に学部長によるシラバスの点検によって、極端なシラバスの精粗が生じないようにしており、他方で、授業終了時のアンケートにはシラバス項目（「授業は、シラバスに示された授業の到達目標や授業計画に沿っていましたか？」）が入っている。これらによって、できうる限りの、必要な整合性を確保しようとしている。

・ 教育課程の編成にあたっての順次性及び体系性への配慮。各科目へのコース・ナンバーの付与（教育学科は教育学概論ⅠのEDUC100から、児童教育学科は初等教育原理ⅠのPRED100から開始）とカリキュラム・マップの導入により、順次性と体系性は十分に配慮されており、これは学生にも周知徹底されている。

・ 単位制度の趣旨に沿った単位の設定。シラバスには家庭学習に要する時間が示されており、これはすでに、学生・教員双方が参照すべき数値となっている。

・ 個々の授業科目の内容及び方法。授業科目の性格によっては、1 Semester 3 単位制（週二回授業を実施）を導入するなどの工夫をおこなっている。

・ 授業科目の位置づけ（必修、選択等）。教育学部では、必修科目・選択必修科目・選択科目という区分を導入して、各学年間のバランスを図り、無理のない科目履修がおこなわれるように工夫されている。

・ 各学位課程にふさわしい教育内容の設定。教育学科と児童教育学科ともに、国内外の近年の教育の動向あるいは教職・教育関係キャリアの変遷を見据えた教育課程を編成を目指している。いくつかの特徴を挙げると、グローバル化への対応としての比較・国際教育関係

科目の増加、心理職の構造変動に対応できる心理学関係科目の整備、障がいや特別な支援を必要とする人々への教育的対応などである。

・初年次教育、高大接続への配慮、教養教育と専門教育の適切な配置等。初年次教育はすでに3回のカリキュラム改訂を経て、現在の「初年次セミナー」を実施している。これはその内容・方法ともに特色ある初年次教育と呼ぶにふさわしい科目である。(根拠資料4-1:シラバス)

「学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成する教育の適切な実施」については、1年次より、教職・教育関係だけでなく、さまざまなキャリアを前提とした指導をおこなっている。四年間を通じて、全学的ないわゆる就業力テストへの参加とそれによるみずからのキャリア指向と諸能力の確認を促し、他方で、二年次に「教育とキャリア」を置いている。

点検・評価項目④：学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

評価の視点1：学部において授業内外の学生の学習を活性化し効果的に教育を行うための措置

- ・各学位課程の特性に応じた単位の実質化を図るための措置（1年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定等）
- ・シラバスの内容（授業の目的、到達目標、学習成果の指標、授業内容及び方法、授業計画、授業準備のための指示、成績評価方法及び基準等の明示）及び実施（授業内容とシラバスとの整合性の確保等）
- ・学生の主体的参加を促す授業形態、授業内容及び授業方法
- ・授業形態に配慮した1授業あたりの学生数
- ・適切な履修指導の実施

すでに全学において、履修登録単位数の上限設定が実施されているが、これとは別に、教育学部では以下のように、いわゆる「単位の実質化」のための諸措置を、すでに2回のカリキュラム改訂を経て推進している。

・重点科目（必修科目あるいはこれに準ずる科目）を指定し、優先的にSAを配当している。

・シラバスの機動的活用。全学的にシラバスは紙ベースからウェブ・ベースに移行完了しており、学期途中でも、書き換えることが可能になった。学期初めに作成したシラバスを一字一句変更しないということではなく、科目として果たすべく学習成果を確認しつつ、同時に、学生の学修の状況に応じて、シラバスを機動的に改訂することが必要なのである。この思考法によって、授業アンケートのシラバス項目も、従来の「シラバスどおりに授業をおこなったか」に加え「学生への周知の上で計画が変更された場合は、授業は変更された計画に沿って行われましたか」という一項が入ることになった。

・学生参加型あるいは学生参画型授業の増加。(根拠資料4-2:授業アンケート結果)
学生の授業参加あるいは参画は、必ずしも学習成果を生み出すとは限らないが、授業によっては、予期せぬような学習成果を生み出す可能性をもつため、このようなタイプの授業は推奨されるべきであろう。

・このほか、授業前のグループ学習会を必須とする授業、プロジェクト型学習を取り入れた授業など、従来の講義に、新たな要素を加えることで、その効果を高める授業が多くの教員によっておこなわれている。(根拠資料4-3:授業アンケート結果)

点検・評価項目⑤：成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

評価の視点1：成績評価及び単位認定を適切に行うための措置

- ・ 単位制度の趣旨に基づく単位認定
- ・ 既修得単位の適切な認定
- ・ 成績評価の客観性、厳格性を担保するための措置
- ・ 卒業・修了要件の明示

評価の視点2：学位授与を適切に行うための措置

- ・ 学位論文審査がある場合、学位論文審査基準の明示
- ・ 学位審査及び修了認定の客観性及び厳格性を確保するための措置
- ・ 学位授与に係る責任体制及び手続の明示
- ・ 適切な学位授与

・ **成績評価とそれに伴い単位認定は適切に行われている。**

理由1：開講科目のシラバスにはそれぞれ到達目標が明示されている。これを基準にして成績評価を実施することによって、評価の公明性を確保している(根拠資料4-4:シラバス)。

理由2：到達目標を明示し、これを基準に成績評価をした上で、さらに上位成績の割合を制限することによって、成績評価の質の保証に努めている。SとAを受講者数の30%以内にするという全学の方針に準拠して、教育学部もこの割合の厳格化に努めている(根拠資料4-5:教授会資料)。

理由3：上位成績の割合について、教育学部教育・研究検討委員会や教育学部教授会において定期的にチェックするとともに、その改善を試みている。上位成績の割合は30%を超える傾向にあるが、この結果を受けて、科目の性質上例外とすべきか否かを検討したり、担当者に割合の厳格化を促したりしている(根拠資料4-6:教授会資料)。

・ **学位授与は適切に行われている。**

理由1：上記の成績評価の厳密化に基づき単位を認定するとともに、この単位の積み重ねという結果において学位を授与することとしている。

理由2：全学の基準に合わせて、GPA2.0を下回る場合には、所定の単位数を充足していたとしても学位を授与していない。これにより学位の質の保証に努めている(根拠資料4-7:学則)。

点検・評価項目⑥：学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

評価の視点1：各学位課程の分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定

評価の視点2：学習成果を把握及び評価するための方法の開発

- ・ アセスメント・テスト
- ・ ルーブリックを活用した測定
- ・ 学習成果の測定を目的とした学生調査
- ・ 卒業生、就職先への意見聴取

・ 学習成果について把握することが試みられている。

理由1：学位授与方針に基づきラーニング・アウトカムズを設定するとともに、これを各科目に割り当てることによって、各科目の単位認定に伴って学位授与方針に明示した学習成果が把握できる仕組みを用意している（根拠資料4-8：履修要項）。

理由2：教育学部による独自の学生調査を春学期と秋学期それぞれで実施し、その中の質問項目を活用することで、学位授与方針に明示した学生の学習成果の把握に努めている（根拠資料4-9：学生調査報告）。

理由3：全学で授業アンケートを実施しているが、そこでの学生の自己評価を参考にし、学位授与方針に明示した学生の学習成果の把握を試みている（根拠資料4-10：授業アンケート）。

理由4：全学のAP事業で導入されたアセスメント科目を設定し、マイル・ストーン科目、タッチ・ストーン科目、そしてキャップ・ストーン科目における学生の自己評価を、学位授与方針に明示した学生の学習成果の把握ために活用している（根拠資料4-11：AP事業資料）。

理由5：数年前から教育学部生の生活と学習の実態調査を実施している（根拠資料4-12：学生調査）。また対象学生を抽出し聴き取り調査も始めている。両調査から学位授与方針に明示した学生の学習成果を捉えることが試行されている。

・ 学習成果について評価することが試みられてはいるが、いまだその端緒にある。

理由：上記の把握は理由1を除くと、学生の自己評価に依存している。そのため、これには評価の客観性が乏しいことを問題として挙げるができる。この問題をどのように解決するかは、今後の大きな課題となっている。

点検・評価項目⑦：教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点1：適切な根拠（資料、情報）に基づく点検・評価

- ・ 学習成果の測定結果の適切な活用

評価の視点2：点検・評価結果に基づく改善・向上

・ 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価は定期的に行われている。

理由1：各開講科目全体を通してラーニング・アウトカムズをバランスよく網羅しているかどうか、学生に対する各種アンケート結果から、教育課程の内容・方法が専門性の観点かつ円滑な学習の観点から適切であるかどうかについて、教育学部教育・研究検討委員会において点検を行っている。

理由2：心理学系、教科教育学系、幼児教育系の開講科目の担当者が、チームを組んでそれぞれの教育課程の内容や方法の適切性について、定期的に点検を行っている。

・ 点検・評価の結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行ってはいるが、いまだその端緒にある。

理由1：教育学部教育・研究検討委員会での検討を経て、実際にラーニング・アウトカムズの改善が図られたことがある（根拠資料4-13：履修要項）。一定のラーニング・アウトカムズに各科目が集中してしまう傾向が明らかになっているが、この具体的改善については検討の段階にとどまっている。また、教育学科の3単位科目の扱いについて、カリキュラム改定の時期に伴いこの改善が求められることについては十分に把握されているものの、具体的な改定案については、現在のところ検討中である。

理由2：心理学系、教科教育学系、幼児教育系の開講科目の担当者がチームを組んで定期的に検討を行っているが、この成果を次のカリキュラム改定に反映させるべく、その準備を重ねている段階にある。

第5章 学生の受け入れ

(1) 現状の説明

点検・評価項目①：学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

評価の視点1：学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針を踏まえた学生の受け入れ方針の適切な設定及び公表

評価の視点2：下記内容を踏まえた学生の受け入れ方針の設定

- ・ 入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像
- ・ 入学希望者に求める水準等の判定方法

教育学部における学生の受け入れ方針の策定および公表の状況については、意識的かつ計画的に行われているといえる。

教育学部は、高度な専門性と実践的指導力を兼ね備えた教員を養成すること、また、「人間教育の最高学府たれ」との建学の精神のもと、教育界ならびに教育に関わる事業において、人間教育の体現者を送り出すことを主な教育目標としている。

そのために求める学生像とは、教育の分野で活躍できる人間性と知性を併せ持つ学生である。具体的に言えば、人間主義に立脚した教育学を学び、人間に対する深い関心を持ちながら、学校教育現場や心理・福祉関係、教育行政職等の分野において将来発揮されるべき、高い実践力を養うことに意欲を持つ人を望んでいる。

本学部が求めるこのような学生像については、これまで様々な機会を通して周知徹底してきた。例えば大学や教育学部のウェブページ、入試要項、キャンパスガイドなどに掲載し、オープンキャンパスにおいて直接受験生や高校生に伝えてもいる。

また、本学部に入学するにあたり修得しておくべき知識等の内容・水準を明示するため、PASCAL入試や公募等の推薦入試に合格した者に対しては、入学前教育として課題を与え、レポート提出を求めるなどして、1年次の大学教育に向けての準備を図るよう丁寧な指導をしている。

身体に障がいのある受験生については、受験上の配慮が必要かどうかを前もって確認して受験体制を整えるとともに、入学後に必要となる施設、備品等についても確認の上、準備するようにしている。また、ノート・テイキングの便宜を図るなど、修学上の特別な支援を行い、健常者と障がい者がともに学べる環境づくりを推進している。

第6章 教員・教員組織

(1) 現状の説明

点検・評価項目①：大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

評価の視点1：大学として求める教員像の設定

- ・各学位課程における専門分野に関する能力、教育に対する姿勢等

評価の視点2：各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針（各教員の役割、連携のあり方、教育研究に係る責任所在の明確化等）の適切な明示

教育学部が教員に求める能力と資質とは、第一に「創価大学教員の任用手続きに関する規程」「創価大学教員昇任手続に関する規程」「創価大学教員昇任基準」等において全学的に明確化されている。また、2019年度以降は「創価大学テニユアトラック規程」に基づき、講師以上の職位で採用する新規専任教員に関しては、将来任期の定めのない教員への移行を希望する教員についてはテニユアトラック教員として採用し、採用後の一定年数を経た時点で、本学教員として適切な能力と資質を有しているかが審査され、認定されるとテニユア教員へ移行することとなっている。なお、助教については、最長で3年任期であるが、「創価大学学部（看護学部を除く）助教任用基準並びに任用手続内規」に基づき、採用2年目に任期延長に関する審査が行われることとなっている。

上記のような全学的な基準に加えて、学部の性格上、多様な学問分野の教員が所属しているため、学部独自の任用・昇任に関する内規を定めている（根拠資料6-1：音美体教員任用基準）。

上記の規程・内規に従って、学部教授会で学部長が人事を発議する。候補者は教授会が選任した人事委員会によって審議され、必要な要件を満たしていると判断されると、学部教授会にて公表され、教授会が選任した2名の審査委員によって審査が行われる。

教育学部には教育学科と児童教育学科の2学科があり、教育学科では教育学と心理学に対応する教員を学部教育に必要な人数だけ配置すること、児童教育学科では小学校教員を養成する観点から、各教科の専門家を配置することを編制方針としている。

第7章 学生支援

(1) 現状の説明

点検・評価項目②：学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

評価の視点1：学生支援体制の適切な整備

評価の視点2：学生の修学に関する適切な支援の実施

評価の視点3：学生の生活に関する適切な支援の実施

評価の視点4：学生の進路に関する適切な支援の実施

評価の視点5：学生の正課外活動（部活動等）を充実させるための支援の実施

評価の視点6：その他、学生の要望に対応した学生支援の適切な実施

本学では、修学支援、生活支援、進路支援に関する方針として「学生支援ポリシー」を定め、同ポリシーに基づいた学生への支援を行っている（根拠資料7-1：大学ウェブページ）。

修学支援に関して、学生の能力に応じた補習教育として、大学教育の前提となる知識・技能の修得を目的とするリメディアル科目（卒業単位には算入しない）が設定されている。また学生の自主的な学習促進のために、学習支援センター（SPACE）によるレポート指導を始めとする学習支援プログラムや語学レッスンが提供されており、他にも各学部等主催のシンポジウムや研究会に参加する機会も用意されている。障がいのある学生への必要な支援・配慮もなされており、留学生への支援は国際部が日本語支援から生活支援まで幅広く対応している。学習の継続に困難を抱える学生に対しては、学業成績が一定水準に満たなかった学生に対して担当教員による面談を実施し、大学として面談報告書を取りまとめることで、当該学生が抱える困難な状況を克服できるように継続的な注意を払っている。授業料の減免や独自の奨学金制度等に関して、本学はすべての学部において新入学生の学費が全国私大平均より低く設定されており、また本学独自の11種類の奨学金制度はすべて返還義務のない給付型奨学金となっている（根拠資料7-2：創価大学奨学金ガイドブック2020）。

生活支援について、カウンセリング等の体制としては、臨床心理士資格を持つカウンセラーによる相談が無料で受けられる学生相談室が平日に利用可能であり、火曜日・木曜日については留学生向けに英語での相談対応も行っている（根拠資料7-3：学生相談室パンフレット）。学生の生活環境に配慮した支援として、本学は12施設に及ぶ学生寮が存在しているが、寮の上級生による日常的な支援や、寮担当の教職員による定期的な相談支援が行われており、大学生活・寮生活に適応しやすいサポート体制となっている。ハラスメント対策としては、2012年に「学校法人創価大学キャンパス・ハラスメントの防止及び対策に関する規程」を設け、キャンパス・ハラスメント防止委員会による教職員向け研修の実施などの啓発活動が行われている。部活動・サークル活動への支援については、学生課による必要なバックアップを受けつつも学生主体の団体（学友会）による自主的な管理が行われている。ボランティア活動への支援については、学生課による情報提供のほか、海外で2週間程度のボランティア活動に参加する大学主催のプログラムも用意されている（根拠資料7-4：キャンパスガイド2020 p.22.）。その他にも、大学と新宿駅西口を結ぶシャトルバスの運行や、学内の宿泊所に1,100円で前泊できるサービス、100円朝食の実施など、多角的に生活支援

を行っている。本学は「学生のための大学」という方針を先駆けて示した伝統があり、その方針を象徴する仕組みとして、大学側と学生側の代表が大学運営について協議する全学協議会が定期的に開催されている。

進路支援については、教育課程にキャリア教育系科目群が用意されるとともに、キャリアセンターによる就業力テストや各種資格試験対策講座、就職イベントが行われている。総括するならば、大学全体としての学生支援の取り組みは質量ともに充実していると考えられる。

教育学部における学生支援の取り組みは、大学全体の取り組みに沿うものであるといえるが、学部独自の取り組みについて以下で取りあげる。

修学支援については、教職志望の学生の授業力の向上を目的とした課程外での模擬授業への取り組み（Step Labo）が存在する。また、英語教諭や小学校教諭志望者を中心に語学力の向上を目的とした TOEIC 対策の勉強会（PEGASUS CLUB）も存在し、毎学期 TOEIC スコアを 100 点以上伸ばす学生が何人も生まれている。

生活支援については、学部内のサークル（教育学部企画）による履修相談会、教員との共同学習の機会が提供されている。

進路支援については、教育学部生を中心とした教職志望者を支援する教職キャリアセンターが学部棟内にあり、各種情報提供、ガイダンス、専任の指導講師による論作文・面接指導、相談対応などが行われている。また、学部の両学科の教育課程において「教育とキャリア」という科目が設定されており、キャリア教育の意義について学問的に捉える機会を提供している。

第9章 社会連携・社会貢献

(1) 現状の説明

点検・評価項目②：社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また、教育研究成果を適切に社会に還元しているか。

評価の視点1：学外組織との適切な連携体制

評価の視点2：社会連携・社会貢献に関する活動による教育研究活動の推進

評価の視点3：地域交流、国際交流事業への参加

本学はかねてより、教育と研究の更なる発展を目標として、国内の大学等の諸組織と体系的で継続的な教育研究の連携・交流を推進してきた（根拠資料9-1：創価大学社会連携ポリシー）。このような社会連携・社会貢献において、教育学部も一定の役割を果たしてきた。

2000年以來、全国に先駆けて単位化を実施した「学校インターンシップ」は、八王子市内の小中学校を中心に、大きな影響を与えたばかりか、全国の教員養成大学・学部において、「学校インターンシップ」はすでに必修に近い扱いとなってきた。「学校インターンシップ」は、学生にとって最初の学校教育現場体験であるばかりでなく、地域社会を支える地元学校の教育に大きく貢献しており、それによって生まれた地域連携の信頼関係は、ますます強くなってきている。

ただし「学校インターンシップ」自体は、教職キャリアセンターの管理のもと、すでに教職課程を持つすべての学部広がっており、教育学部単独の取り組みではないことを付言する。

一方、2016年度以來、八王子市教育委員会との連携の下「アクティブラーニング推進校」というプロジェクトを実施している。これは八王子市内の希望する学校を対象に、新学習指導要領で強調される「アクティブラーニング」を効果的に実施するための授業開発研究を指導する事業である。具体的には算数、国語、道徳、英語といった教科ごとに対象校を定め、本学の教員が実際に学校へ出かけて行って授業作りの相談から研究授業の指導まで行うことにより、授業力のアップ及び新しい指導法の開発に貢献するもので、支援した学校から大変感謝されており、今後も続けられる予定である。（根拠資料9-2：八王子市教育委員会広報）

さらに2018年に教育学部は教職大学院と共同で、ユネスコスクール支援大学間ネットワークである「ASPUnivNet」に加盟した。これはESDを積極的に進める学校が「ユネスコスクール」として登録されるのを支援するもので、2019年度は八王子市内の小中学校3校、中学校1校を支援し、いずれもユネスコスクール登録申請に結びつけることができた。さらに現在、東京23区、埼玉県の4校を支援している。（根拠資料9-3：ユネスコ・アジア文化センター年次報告）

教育学部は今後も地域社会との連携を重視し、学問研究の成果を還元する活動に注力していきたい。

2. アセスメント・ポリシーに基づいた学習成果の測定及び可視化を推進

教育学部では、まず教育者側の視点から、カリキュラム・マップに基づく学位プログラムの妥当性に対して点検を加え、一方学習者側の視点から、学部学生調査の回答に対して検討を加えた。

これら両面の分析により、学習成果がある程度測定・可視化されたと考えるが、アセスメント・ポリシーではもっと具体的な指標による測定を掲げており、ひとつずつ丁寧に取り組んでいく必要がある。

(1) カリキュラム・マップに基づく学位プログラムの妥当性の点検

教育学部では、すでにディプロマ・ポリシーとして発表している 8 項目のラーニング・アウトカムズに基づくカリキュラム・マップを、履修要項及び各科目のシラバスにおいて公開しているが、それらを元に各項目の裏づけとなる科目がどれだけあるかについて点検を行った。その結果を以下に示す。

《教育学科》

コード	1	2	3	4	5	6	7	8	科目名
EDUC100	◎						○	○	教育学概論Ⅰ
		◎	○					○	
EDUC101	◎						○	○	教育学概論Ⅱ
		◎	○					○	
EDUC110	◎	○	○						心理学概論Ⅰ
EDUC111	◎	○	○						心理学概論Ⅱ
EDUC140	◎				○	○			教職概論:教育
						○	◎	○	
EDUC200		◎				○		○	学校研究:教育
EDUC201	◎	○			○				教育学研究法
EDUC202	○		○				◎		教育哲学
EDUC203	◎							x	教育社会学
EDUC204	◎				○			x	カリキュラム論
EDUC210	◎			○		○			教育心理学Ⅰ
EDUC211	◎			○		○			発達心理学Ⅰ
EDUC220	○							◎	x 国際開発教育論
EDUC221	◎	○	○						海外から見た日本の教育
EDUC300	◎	○						○	教育方法学
EDUC310					○		○	◎	臨床心理学Ⅰ
EDUC311			◎		○	○			教育カウンセリング
EDUC320		◎	○				○		比較・国際教育学A
EDUC321	◎	○	○						比較・国際教育学B
EDUC130	○					○		◎	スタディー・リーダー基礎
EDUC102	◎	○			○				教育史A

EDUC103	◎	○	○						教育史B
EDUC150	○			◎			○		生涯学習概論
EDUC151	○			◎			○		社会教育概論
EDUC192									海外教育事情 A
EDUC193									海外教育事情 B
EDUC290						○	◎	x	英語コミュニケーション I
EDUC291						○	◎	x	英語コミュニケーション II
EDUC205	◎	○			○				教育行財政学
EDUC212			○		◎	○			教育心理学 II
EDUC222	◎		○			○			Educational Psychology
EDUC223		◎						x	Sociology of Education
EDUC224	◎				○	○			国際教育特論A
EDUC225	○			○	◎				国際教育特論B
EDUC230		○	○			◎			ミュージアム・エデュケーション I
EDUC231		○	◎			○			ミュージアム・エデュケーション II
EDUC232					◎	○		○	学校インターンシップ I
EDUC233					◎	○		○	学校インターンシップ II
EDUC240	◎				○	○			生徒・進路指導論
EDUC241					○	○	◎		特別活動
EDUC242							◎	x	教育とキャリア
EDUC250				◎		○	○		社会教育特講A
EDUC251				○	○	◎			社会教育計画 I
EDUC252				○	○	◎			社会教育計画 II
EDUC170	◎							x	日本史 I
EDUC270	◎							x	日本史 II
EDUC171		○	○					x	外国史 I
EDUC271	◎				○	○			外国史 II
	○	◎						○	
EDUC172		◎						x	法学概論
EDUC173		○	◎					○	政治学概論
EDUC174		○	○					x	地理学 I
EDUC272		○	○					x	地理学 II
EDUC175		○	◎					x	倫理学概論
EDUC176		◎	○					x	宗教学概論
EDUC177		○	◎					x	哲学概論
EDUC178	○		◎		○				社会学概論
EDUC292	○	○	◎						英語特講 A
EDUC293	○	○	◎						英語特講 B
EDUC294									英語特講 C
EDUC295									海外教育研修
EDUC301									教育評価
EDUC302				◎	○		○		教育学特講 A
EDUC303									教育学特講 B
EDUC304		◎	○				○		教育学特講 C
EDUC305									教育学特講 D
EDUC312	◎			○	○				発達心理学 II

EDUC313					◎		○	○		臨床心理学Ⅱ
EDUC314	◎		○	○						心理学特講 A
EDUC315	○			◎		○				心理学特講 B
EDUC316										心理学特講 C
EDUC317										心理学特講 D
EDUC333					◎	○		○		学校インターンシップⅢ
EDUC334					◎	○		○		学校インターンシップⅣ
EDUC340			○			○		◎		道徳教育論
EDUC341			◎			○	○			環境教育論
EDUC342			○		○	◎				情報教育論
EDUC343	◎	○				○				インクルーシブ教育論
EDUC344	◎				○	○				総合的な学習の時間の指導論
EDUC350										児童福祉論
EDUC351			○			◎		○		社会教育課題研究Ⅰ
EDUC352			◎	○		○				社会教育課題研究Ⅱ
EDUC353					○	◎		○		社会教育演習
EDUC354		○	◎			○				社会教育特講B
EDUC370			◎						x	地誌学
EDUC371	◎				○				x	人文地理学
EDUC372	◎				○				x	自然地理学
EDUC335						○	◎	○		教育実習(中・高)
EDUC336						○	◎	○		教育実習(高)
EDUC433					◎		○	○		教職実践演習(幼・小)
					◎		○	○		
					◎	○	○			
					◎	○	○			
					○		○	◎		
					○		○	◎		
					○	◎	○			教職実践演習(中・高)
						◎	○	○		
						◎	○	○		
EDUC190				◎					x	Academic Skills I
EDUC191				◎					x	Academic Skills II

◎ 28 9 12 7 11 9 8 6
○ 11 21 21 8 24 32 20 22

《児童教育学科》

コード	1	2	3	4	5	6	7	8		科目名
PRED100	◎	○				○				初等教育原理Ⅰ
	◎		○				○			
	◎								x	
PRED101	◎	○				○				初等教育原理Ⅱ

	◎		○				○		
	◎						○		x
PRED110	◎				○	○			心理学概論Ⅰ
PRED111	◎	○			○				心理学概論Ⅱ
PRED140					○		○	◎	教職概論
PRED200			◎			○		○	学校研究
PRED204					○	◎	○		カリキュラム論
PRED210				○	◎	○			教育心理学
PRED205	◎	○			○				教育行財政学
PRED211	◎			○			○		発達心理学
PRED300			○		◎	○			教育方法論
PRED130	○					○		◎	スタディー・リーダー基礎
PRED180	◎				○	○			特別支援教育概論
PRED171	◎			○	○				幼児と健康
PRED172	○					○	◎		幼児と人間関係
PRED173	◎			○				○	幼児と環境
PRED174	◎						○	○	幼児と言葉
PRED175	◎				○			○	幼児と表現
PRED150			◎		○	○			図工科教育
PRED151	○				◎	○			体育科教育
PRED141		○	◎				○		表現と鑑賞
PRED192									海外教育事情 A
PRED193									海外教育事情 B
PRED194									海外教育研修
PRED270	◎						○	○	保育・教育課程論
PRED271	◎						○	○	保育方法論 小山
	○				◎			○	戸田
PRED272	◎			○		○			保育内容(健康)の指導法
PRED273	◎					○	○		保育内容(人間関係)の指導法
PRED274	◎			○				○	保育内容(環境)の指導法
PRED275	◎				○			○	保育内容(言葉)の指導法
PRED276	○					○		◎	保育内容(表現)の指導法 足立
		○		○	◎				堀館
PRED278	◎			○	○				幼児理解の理論と方法
PRED240		○	◎		○				生徒・進路指導論
PRED241	○					◎	○		特別活動論
PRED280	◎				○	○			LD等教育総論
PRED242							◎		x 教育とキャリア
PRED243		○				◎	○		自然体験
PRED250	◎				○		○		国語科教育
PRED251	◎					○			x 社会科教育
PRED252	○			○				◎	算数科教育
PRED253	◎					○		○	理科教育
PRED254	○					○	◎		音楽科教育

PRED255	○			○		◎			英語科教育
PRED256	○					◎		○	生活科教育
PRED257	○				○	◎			家庭科教育
PRED232					◎	○		○	学校インターンシップⅠ
PRED233					◎	○		○	学校インターンシップⅡ
PRED230		○	○			◎			ミュージアム・エデュケーションⅠ
PRED231		○	◎			○			ミュージアム・エデュケーションⅡ
PRED333					◎	○		○	学校インターンシップⅢ
PRED334					◎	○		○	学校インターンシップⅣ
PRED380	◎				○	○			インクルーシブ教育論
PRED301									教育評価
PRED311			◎		○	○			教育カウンセリング
PRED370	○				◎			○	幼児教育総合演習
PRED340	○				◎			○	道徳教育論
PRED341			○		○	◎			情報教育論
PRED342	◎	○	○						Environmental Science
PRED343									社会科特論
PRED344									授業のためのピアノ
PRED345	◎				○	○			総合的な学習の時間の指導論
PRED302									教育学特講 A
PRED303									教育学特講 B
PRED314									心理学特講 A
PRED315									心理学特講 B
PRED390	○	○	◎						英語特講 A
PRED391	○	○	◎						英語特講 B
PRED480	◎		○					○	特別支援教育特論
PRED335						○	◎	○	教育実習(幼・小)
PRED433					◎		○	○	教職実践演習(幼・小)
					◎	○	○		
					○		○	◎	
PRED160	◎				○		○		国語学概論
PRED360									文学・物語
PRED361									読解・言語活動
PRED161	○				◎		○		数学概論
PRED362									図形
PRED363									数量関係
PRED162		◎	○					○	社会科概論
PRED364									社会科内容研究
PRED163	◎	○	○						理科概論
PRED260	◎	○					○		理科実習
PRED164	○					◎		○	生活科概論
PRED261	○				○	◎			英語概論
PRED365									英語科内容研究
PRED165	◎		○				○		音楽概論
	○						◎	○	担当？

PRED262			○		○		◎		音楽総合 A
PRED366									音楽総合 B
PRED166		○	◎				○		美術概論
PRED263		◎	○		○				造形表現基礎
PRED167	◎					○		○	体育概論
PRED264	◎					○		x	運動学習と身体表現
PRED265					○	○	◎		運動技術の探究
PRED168	◎					○	○		家庭科概論
PRED281	○					◎		○	知的障害教育 I
PRED282	◎			○		○			障害者の心理・生理・病理B
PRED283	◎			○			○		視覚・聴覚障害教育総論
PRED381	◎					○		○	知的障害者の心理・生理・病理
PRED382	○					◎		○	知的障害教育 II
PRED383	◎				○			x	肢体不自由教育総論
PRED384	◎				○	○			病弱教育総論
PRED385	◎				○	○			肢体不自由者の心理・生理・病理
PRED386	◎			○	○				障害者の心理・生理・病理A
PRED387	○				◎	○			LD等の心理・生理・病理
PRED481	○				◎	○			障害者の心理特論
PRED434						○	◎	○	教育実習(特別支援)
PRED190				◎				x	Academic Skills I
PRED191				◎				x	Academic Skills II

◎ 44 2 9 2 16 12 8 5
○ 23 16 12 13 29 40 25 26

こうして見ると、教育学科は比較的項目ごとのバランスがよいが、児童教育学科は第1項目にウェイトが集中し、バランスが悪いことがわかる。これは、児童教育学科の多くの科目が教科教育に関連していることから必然的に生じる状況であるが、今後ラーニング・アウトカムズの見直しも含め、バランスのよい学位プログラムになるよう検討していきたい。

(2) 学部学生調査による学生の学習状況や心理状態の分析

教育学部では過去5年間にわたり、毎学期の初めに全学生に対する「学部学生調査」を行っている。主観評価ではあるが、回答内容を分析することにより、学生の勉学に対する姿勢や心理状態をある程度知ることができる。

その分析結果を以下に示す。

《学生調査分析まとめ》

教育学部の一つの課題として、入学当初教員を目指していた学生がその途中で進路変更

をした場合のキャリア支援がある。自身の適性や進路に迷いが生じ教員への興味を失う場合、成績不振で進路変更を余儀なくされる場合など様々だが、就職活動に出遅れてしまうことや心理面での揺らぎによる不調など支援ニーズは高いと考えられる。

本学部では、学生の実態を把握し学部カリキュラム向上に資する基礎的データの収集、及び支援ニーズのある学生の早期発見のためのツール開発を目的として、2014年度より各 Semester 開始時と4年次の年度末に、全学生を対象とした継続的な質問紙調査（以下、学生調査）を実施している。今回、2015年度入学生を対象とした縦断調査を分析し、以下の傾向があることが明らかになった。

「将来の進路について見通しがある（展望）」、「現在考えているいくつかの職業のなかから、一つの職業に絞り込むことができる（選択する力）」、「いくつかの職業に興味を持っている（柔軟性）」の3変数でクラスタ分析を行った結果、4群に分かれた。

1. 拡散群：入学時に展望をあまり持てておらず、在学中、学生調査の多くの項目で最も低い得点であり、卒業直前の調査では、「進路についての悩みや迷いは現時点である程度解決した（悩みの解決度）」の項目で他の3群に比べ有意に低い得点であった。早い時期から何らかの支援や介入が必要ではないかと思われる群。
2. 早期決定群：入学時から教員になるという展望を持っており、4年間あまり揺らぐず、教職以外に興味を持たない群。
3. 積極的模索群：展望は持っているが、教職以外の職業にも興味をもっており、積極的に模索する群。その結果として教職を選択する場合もあるが他の職業を選択する場合も

ある。

4. スロースターター群：拡散群と同様に、入学時には展望はあまり持っていないが、3年次9月の時点で、所属学科の学びが自分の興味関心に合っていると評価する得点が上昇しており、卒業直前の調査では「悩みの解決度」は拡散群より有意に高い。スロースターターで、既存のキャリアプランや就職支援には対応しづらいと思われるスローペースなタイプであるが、卒業時には進路に関する悩みをある程度解決していく群。学生のペースに合わせて就職支援のプログラムを提供することが望ましい。

本学部は教員養成を大きな柱とし、学生たちがキャリアビジョンを比較的明確にしやすいため、早期決定群のように入学時から卒業まで教職を目指し、その気持ちが揺らがない学生がいる一方で、進路選択やキャリア形成に支援ニーズのある学生が一定数存在することが示唆された。特に拡散群、スロースターター群に対しては、何らかの支援あるいは介入が必要と思われる。特に拡散群については、卒業直前の時期でも進路についての「悩み解決度」が低得点であり、卒業後にも問題を持ち越している可能性がある。卒業後のフォローアップも含めて丁寧なサポートを提供できるような体制を整えることが望ましい。

(根拠資料：学生調査クラスター分析)

3. 学生参加型の内部質保証体制の推進について

内部質保証推進における学生の参加状況について

【評価分科会名】

教育学部評価分科会

教育学部では、自己点検・評価に関する下記の2つの会議において、学生参加のもと討議を行った。それぞれについて簡潔に内容を記す。

1. 初年次セミナー担当者会議

【学生の参加有無】

有（2名）

【学生の所属】

- ① 学部自治会・2018年度初年次セミナーSA
- ② 2019年度初年次セミナー統括SA

【会議における学生の立場】

オブザーバー

【実施状況】

・日時 2019年7月30日、16:00-17:30

・議題

1. 初年次セミナーにおけるクラス別授業に関する各担当教員の振り返り
 2. 次年度に向けての課題の確認
- ・学生からの意見内容
 - ・クラス別で実施すると、学生は他のクラスの授業内容や課題の量について気になるようである。課題の量や内容は、再度検討してもよいのではないか。
 - ・レベル別のよさもあるが、授業後の読解力や表現力の伸びを評価することは困難である。
 - ・SAの仕事がクラスによって異なるため、配置や業務内容については改善できないか。
 - ・各クラスの授業内容の情報を学生にどのように示すのかは検討してもよいのではないか。
 - ・読解力や表現力は、1 Semesterに限定せず継続的に学習できるとよいように思われる。

【学生からの意見の反映状況】

・クラス分けの前に、教育が学生に期待することや、初年次セミナーのゴールイメージを説明してからクラス別の授業を開始することで、学生に学びの見通しを立たせるようにす

る。

- ・ SA の位置づけについては、授業内の作業の指示等を含めて再度検討する。
- ・ 本授業の到達目標は 4 年間を通して達成するものと捉えれば、学習に向かう姿勢をつけることが課題となる。そのためには、個々の学生に今の自分の課題や、つけたい力を考えさせる。
- ・ クラス別授業の課題内容、課題量、評価方法については、担当教員で継続して検討する。

【その他】

- ・ 学生が参加したことによる効果もしくは課題等

効果

今回は 2 名ともに SA 担当者であったため、授業内容を把握した上での意見交換が可能となった。教員が課題と認識していた点は、SA も同様の認識を抱いており、改善に向けての行動が明確になった。

(課題は特にはなし)

2. 教育学部学生検討会

【学生の参加有無】

有 (3 名)

【学生の所属】

- ① 教育学科 4 年・CSS スタッフ
- ② 教育学科 4 年・教員採用試験合格者
- ③ 教育学科 4 年・企業就職予定者

【会議における学生の立場】

参加者

【会議実施状況】

・ 日時 2019 年 11 月 20 日 (水) 12:15-13:00

・ 議題

学部教育を通じた自らの成長及び成果

特に今回は特にディプロマ・ポリシーとの関連において、どのような成長や成果を感じているのかを振り返ってもらい、聴き取りを行なった。

・ 学生からの意見内容

知識・理解

1. 教育学または心理学に関する基本的な知識及び方法を習得する。
2. 世界の事象を教育的な問題として捉えることができる。教育学と心理学に関する基本的な知識を修得する。

(上記該当部分に関する学生の振り返り)

- 基本的に全ての項目は達成できている。特に3つ目の項目に関しては、個人的には、日本の教育の在り方を学ぶことで、異国の教育制度についても興味関心が深まり、留学時には、留学先の国と日本を比較しながら教育問題に向き合うことができた。
- 教育学と心理学についての基本的な知識の習得はできているように思う。特に、発達心理学の知識は、年代ごとにどのような特徴があるのか、どの時期にどのような対応をするべきなのかを知ることができ、それを実際の生活でも活かすことができたように感じます。ただ、履修はしたが、ほとんど記憶に残っていない科目もある。科目間のつながりがあると理解が深まるように思う。

考える力

1. 世界の諸問題と自身との関係を考える。
2. 教育学的・心理学的諸問題の解決方法を構想する。

(上記該当部分に関する学生の振り返り)

- 基本的に全ての項目は達成できている。知識・理解と同様に、諸問題の原因を教育学・心理学の観点から捉え思考する力は、身につけている。「世界と自己自身の問題を結びつけながら、反省的に思考する」ことに関しては、教育学部の授業に限らず、大学における様々な活動を通して身につけることができている。
- 教育学を詳しく学んでいくことで、自分が今まで受けてきた教育について反省的に見直すことができるようになったと感じている。過去に行われてきた教育のあり方や現在行われている教育について今一度自分たちで見直してみることで、それぞれの存在意義や改善点等も知ることができ、より深く考えることができるようになったと感じている。
- 民間企業に就職予定だが、就職に関しては、社会の流れに応じたことは自分でフォローしていく必要性があった。だが、教育学部で学んだことは、自分の視野を広げる上では有益であった。教育は一生を通じていくことであるため、その意味では、学部の教育では、企業でも役に立つための視点が豊富である。特に、相手を1つの視点で判断するのではなく、個人をみて、どのような支援ができるかまで思考出来るようになった。
- 学問と自分の日常生活をつなげることができる授業が多かった。このことも、今後に生きると思う。
- 反省的に思考する力はついた。過去のことを見る、現在の教育を見る中で、批判的に思考する。様々な場面で生かせるようになってきていると感じる。
- 自分で特に成長したと感じるのは、物事を批判的に見ることである。現在は教育制度に関心をもっているが、現状の社会や制度を変革していくために、多様な視点で検討する必要性を感じており、そのような視点を習得できた。
- 学校インターンシップに参加して) 実際に学部で理論を通して学んだことが、教育現場で実際に起きていることとリンクした時に、自分の学びが深まったと実感した。大学での学びと学校現場での学びが重なったことは自分にとって大きな経験だった。

行為する力

1. 教育学的・心理学的諸問題の解決へ向けて取り組む。
2. 教育学的・心理学的諸問題の解決へ向け、他者と協働しながら取り組む。

(上記該当部分に関する学生の振り返り)

- ・基本的に全ての項目は達成できている。アクティブラーニングを取り入れている授業が多いため、理論を Input する場も、Output する場は十分設けられている。Output する場に関しては、学部生個人の進路や選択する科目、学外でのアクションによって、実践できる場が異なるため、学生によっては十分な力が身につけていない人もいないのではないかと。
- ・教育学部の1年生と関わる機会が多い。そこで感じることは、教育学部の1年生は、教師を目指すか、心理を目指すかで二極化しているように思う。教職に進むとなれば、インターンシップ等を通して学外での教育実践で体験する機会は充実している。だが、心理に進みたい学生にとって、臨床実践の機会は、関連科目の授業内で実践的なスキルを学ぶ機会はあるが、外で体験できる機会はあまり設けられていないように思う。
- ・教職志望者にとって、インターンシップは、学部で習得した専門的な知識を実際に生かした経験だった。インターンシップを通して学校現場の状況や教師の対応の仕方について大学での学びをもとに理解することができた。

例) インターンシップで通常教室に行けない生徒と関わる機会があった。その生徒は、「起きたら学校に行こうと思うと胸がキリキリする」と言っていた。事前にそうした生徒に関する知識や対応の仕方を教育心理学の授業で学んでいたからこそ、その生徒の発言を共感的に理解することができた。他にも、発達障害の児童生徒に関する知識があったからこそ、そのような生徒たちに合わせた対応ができたと思う。知識を表層的ではなく、深層から理解できた感覚を得た。

態度

1. 絶えず自己の成長を追求する態度を持つ。
2. 他者の成長に対する責任感と倫理性を持つ。

(上記該当部分に関する学生の振り返り)

- ・基本的に全ての項目は達成されている。「人のために」という、ベクトルが他者に向いている学生が多く、他者の違いを受け入れ、尊重する姿勢は基本的に身につけている。また、他者との関わりの中で、触発を受け、自己の学びを促進させていく態度も見られる。
- ・教育学部の授業にはディスカッションの機会やグループワークの時間が多く取り入れられており、コミュニケーションを取らなければならない時間があつたため、他者とコミュニケーションを取る能力は上がったと感じている。その過程で意見の異なる人に出会っても、それを受け入れることができるようになったと感じている。
- ・発言の仕方を根拠を持った上で発言することが重要だり、相手の意見を受容することもできるようになった。その上で、新しい意見を生み出すこともできるようになった。
- ・教師から結論が与えられるわけではなく、そのまま終了した授業も多かった。そのことで、その後も自分で考える機会が与えられ、自分の思考が深まったと感じる。
- ・発言する際には、他の学生の学びになるように思って発言すると自分のさらなる学びになると思った。学生同士で刺激しあえる場に授業があつた。

【学生からの意見の反映状況】

現在は聴き取りの段階である。学生からのどのような意見をどのように学部教育にどのように反映させるかについては、今後検討していく。

【その他】

- ・学生が参加したことによる効果もしくは課題等

効果

1. 学生の視点から学部教育を把握することができる。学生は教員が想定する以上に、自分たちの学びを多様な視点から捉えており、教員にとっても気づきをもたらすものであった。
2. 学生の要望を把握する。今回の参加学生は学外での学び（特に、臨床実践に関して）を求める傾向にあった。ディプロマ・ポリシーの「臨床実践」の意味するところは必ずしも学外での臨床実践の場とは限らないであろうが、学生が本学部の教育に対する改善点としてどのような点を挙げているかを把握することは意味があると思われる。

課題

1. 参加学生の多様性を確保することである。今回は、教育学科の4年生であった。児童教育学科の学生や他学年の学生からも聴き取りをする必要はあるように思う。参加学生を既存の学生組織の代表にするか、本件のために新たに学生を選出していくかを決定する必要がある。

3. 教育学部学生意見聴取

【学生の参加有無】

有（4名）

【学生の所属】

- ① 教育学科1年・幼稚園（保育）教員志望者
- ② 教育学科2年・大学院進学希望者
- ③ 教育学科3年・小学校教員志望者
- ④ 教育学科4年・企業就職予定者

【意見聴取実施状況】

・日時 2020年2月19日（水）～21日（金）

・聴取項目

以下の4点について、聞き取りを行った。

- 1) 授業内容がラーニング・アウトカムズと対応しているか
- 2) 成績などのアウトプットが、学習内容の可視化に繋がっているか

- 3) レポートの負担と学習に向かう姿勢
- 4) 授業外学習時間の実態

・学生からの意見内容

- 1) 授業内容がラーニング・アウトカムズと対応しているか

学生からは、以下のように否定的に捉えられていた。

- シラバス上で示されているラーニング・アウトカムズを意識したことがなく、教員から説明された記憶もない (1, 3, 4年)。
- 意識しているが、授業によってはラーニング・アウトカムズと内容が整合していないと感ずることがある (2年)。また、シラバスに掲載されているのみで、授業内で紹介されることはないため、多くの学生がラーニング・アウトカムズを特に意識せずに授業に取り組んでいると感ずる。

- 2) 成績などのアウトプットが、学習内容の可視化に繋がっているか

以下のように、否定的に捉えられていた。

- 授業科目ごとに A, B などの評価を返されるだけでは、具体的に何を習得できていて、どこを改善すべきかが分からない (2, 3, 4年)。そのため、次の学びに繋がらない (3, 4年)、評価結果に納得がいかない (4年)。
- 一部の授業では、毎回の活動や課題に対して、フィードバックを行っており、学習内容の振り返りに繋がる (2, 4年)。
- 期末試験やレポートが返却されないため、自身が身につけた知識の正誤がわからない (1, 3年)。

- 3) レポートの負担と学習に向かう姿勢

以下のように、レポート作成を肯定的に捉える意見が見られた。

- レポートの書き方を理解した上で取り組めば、新しい知識が身に付くため、意味がある (1年)
- レポート作成を通して、様々な文献を読み、理解を深めたり、知識を得ることができた (2年)
- レポートのテーマと自身の生活や時事問題などを関連付けて考えることで、意義を見出していた (4年)。

その一方で、以下のような否定的な意見も見られた。

- 学期末に集中しており、負担になっている (2, 4年)。
- スケジュール能力の低い学生は、こなすだけの作業にしかになっていない (4年)。
- レポートの書き方を理解していなければ、こなすだけになってしまう (1年)。
- 参考文献を適当に用いて作成するなど、こなすだけになっている学生がいる (3年)。
- 一部の授業では、授業との関連性が低いテーマで作成を求められた (2年)

- 4) 授業外学習時間の実態

以下のように、課題の負担が重く、授業外学習の困難さを訴える意見が見られた。

- 課題が出されなければ、授業外には学習しない（1, 2, 3, 4年）。
- 毎日の課題だけで手一杯である（予習・復習は困難）（2, 3, 4年）。
- 語学や資格の勉強は、学期中は難しく、長期休暇中に限られてしまう（2年）。

【学生からの意見の反映状況】

現在は聴き取りの段階である。否定的な意見が見られた項目の改善を中心に、今後検討していく。

【その他】

- 学生が参加したことによる効果もしくは課題等

効果

ラーニング・アウトカムズの扱いや成績などのアウトプット、レポートや課題の出し方について、現状での問題点が浮き彫りになった。

課題

ここで明らかになった問題点を解決するには、学部に所属する教員がこれらの問題を共有し、授業間で連携して取り組む必要がある。そのためにはFDにおけるカリキュラムマネジメントを推進しなければならないが、その態勢作りが急務である。